「象頭山とは・・・石匠宇七の技」

尾崎地区

「松岩百話集」及川起雄氏

ここでいう「象頭山」は、古谷館の地南端（現八幡神社内南地）に建てられている巨大な石碑にある堂々たる石刻文字のことである。及川起雄氏によるとこれは、石工・斎藤宇七によるものである。あまりに見事なために石工とは言わず「石匠・宇七」と呼ばれた。松岩には多くの宇七作がある。長須賀の庚申供養塔、尾崎の口寄せ場の大日如来像も等身大の石像がみごとなもので、人々の信仰をあつめたという。象頭山石刻は江戸期文政十一年（西暦一八二八年）のことだ。尾崎の大日如来像は、それより二十三年前の文化二年（一八〇五年）で、平成二十四年の現在から二百年前の作となる。如来像は大震災のため、今は跡形もない。尾崎の大日如来は、六部の依頼で宇七が石を刻んだものだそうだ。六部とは「六十六部廻国聖」の略称である。仏教の修行僧で、法華経を笈櫃にいれてかついで霊地に納め歩いた僧のことである。宇七に依頼したといわれる六部は、尾崎川の橋（面瀬川の尾崎地区河口にかかる橋・尾崎橋）をつくったとも言われ

ている。「象頭山」とは、もともとは香川県善通寺市にある山の名前である。金比羅神社から望むその山が、象の頭に似ているので名付けられた。信仰の対象でもある。江戸期以前から、金比羅は船の安全や海、川の泰平をあずかる神として全国の信仰を集めていた。清水の次郎長の子分、森の石松が、次郎長の代参でこの金比羅山に名刀を奉納した。帰りに大阪へ立ち寄り「江戸っ子だってねぇ。神田の生まれよ。食いねぇ。…寿司食いねぇ。」と語る場面（広沢虎造の「三十石船の浪曲」）は昭和初期全国を風靡した。象頭山石刻の石碑は全国の海岸沿いに多く建てられている。海の安全を祈願したものであろう。この近くでは、当地松崎村以外に歌津、石巻にもあった。六部がなぜこの地を訪れ、如来像を建立したのか。及川氏によると、近辺に刑地があったために建てられたということであった。さて、「新・昔ばなし」は、宇七の技量、そして象頭山の名作、六部の来村などをところどころに関連づけて創作してみた。ご一読願いたい。

江戸時代、尾崎川（現面瀬川の尾崎と片浜を流れる部分）には河内屋というあやしい人間を取りしまる捕物師がいた。川を渡ろうとする悪人をとりしまるというものだ。昭和や平成の現代のように治安警察はない時代のこと、一般庶民の治安は領主から任命された捕物師があずかっていた。花の大江戸の銭形平次や鬼平犯科帳の長谷川平蔵の手下である目明かしが、江戸町奉行の治安システムの中にあって活動するのとは違って、地方では恣意的色彩がつよかった。

河内屋得平は実にまじめな人間であった。いや、むしろ頑固な人間と言ったほうが

よい。彼のおじの利吉も捕物師だった。利吉は、病気で亡くなるまでは「鬼吉」と呼ばれて人々からこわがられた。鬼吉が処刑人の黒蔵にひきわたせば、直ちに処刑となった。悪いことをしていなくても、利吉や黒蔵の姿を見るとみな家に隠れたものだ。

得平が捕物師になったころ、だれの世話だか知らないが、尾崎の村に全国行脚の六部が住みつくようになった。六部はある意味では宗教的権威で、得平でも手を出せないところがあった。六部の信力・行力による仏力・法力は言語を絶するものがあったという。六部皆成仏道の教えである法華経の教えにそってあらゆる命に慈しみを与えた。刑に処せられた死者の霊に対しても慈しみを与えたのだ。六部は刑場の近くにある口寄せ場に立って言った。

「多くの迷える霊を感じる。無実の罪にてむごい刑を受けた者が、松崎村や捕物師達にたたりをもたらすと言っておるぞ。拙僧はここに、法華経を納めるとともに如来像を建立してこれらの霊を鎮めるものなり。」

得平は六部の話を聞いて、内心不安になった。おじの利吉が引き立てた者の中に無実

の者がいたとは。おじは、世のため御上(おかみ)のために捕物を行っていたものとばかり思っていた。おじを尊敬もしていた。心配を胸にかくして、得平は、あくまでも捕物師の顔で六部に言った。

「よくも口から出まかせを言ってくれたな。村を安堵させようという者を悪人扱いした。おい、どさまわりの坊主よ、おまえが何と言おうが、おじの利吉に刑を言い渡された者はみな、どこの馬の骨ともわからぬ旅回りの輩(やから)じゃ。もしも、誤って命を落とすとしても、どこかで人に言えぬ悪事の一つや二つは犯しているはずだ。何を証拠に、無実の罪で命をうばわれたなどと言うのだ。おまえこそ、村人をたぶらかす悪者なり。」

聞き終わると、六部はにこりとして言った。

「法華経では、善人はもちろんいかなる悪人たりとも成仏は必定。つまり、人身を受けし者は差別なく成仏できると教える。ぬしの言上こそ無明なり。ぬしのおじの成仏を願わば、法華経を納める如来像を建立したまえ。」

得平は、六部の目の輝きに全てを見透かされた気がした。捕物師なのになぜか体を引いてしまった。六部が 一瞬にして神 々しく見え、尊敬の念がこみあげてきたのだ。得兵はそのくらい心根のきれいな男でもあった。

「六部様、如来像建立は私目にお任せください。きっと村 一番の石工をえらびます。そしてどうぞ 口寄せ場に集まる霊をおなぐさめください。」

得兵は鮎貝の殿様の家老、芦立氏の用人にこの旨を伝えた。用人は直ちに、村 一番いや郡内で 一番の石工宇七に如来像の石刻を命じた。宇七は「石に刻む文字、書人よりも深厚。石に彫る像、命を宿すがごとし。」と言われた名工である。用人から殿様の意を伝え聞いた宇七は、法華経の八葉九尊にあやかり、八夜九日で 口寄せ場に等身大の如来像を石刻した。如来像は六部の法華経読誦によって開眼された。その後、無惨(むざん)な刑はなくなった。尾崎はすこぶる治安のよき地となった。

六部はその後も当地に在留して、さまざまな治水土木 工事を行った。最も有名なのが尾崎橋の架橋 工事である。

それから二十数年経った年である。天のたたりか何事か、尾崎、片浜の漁船が相次いで遭難沈没することがあった。浜に生まれた宇七にも若いせがれができた。宇七ほどの匠だが、せがれは石工を嫌った。海の男達と遊興にふけった。そしてついには漁師になると言い出した。頑固なところは宇七に似ている。不承不承、宇七は首をたてにふった。せがれの乗った船は、よく豊漁を示した。船頭は修五郎。名船頭だ。七つの時から祖父の船に乗ったという。三陸の海を知り尽くしていた。どんなに遭難が多いときも、修五郎の船だけは無事だ。村 人は皆、そう思っていた。だから宇七も安心していた。せがれの乗った船が三陸沖に出たある夜のことである。海から、聞いたことのない轟音のような波音が鳴り続いていたのだ。宇七は胸騒ぎがしてしょうがなかった。気のせいだと、無理やり布団にもぐり込んだ。

その翌朝のことである。太陽がまぶしく宇七の顔を照らしていたが、宇七の 心は晴れなかった。胸騒ぎは的中していた。せがれの乗った船が尾崎に戻らないという。乗り組んだ男達の家族が浜辺に集まって来た。不安きわまりない顔つきで尾崎の沖を見つめている。ある者は失望し、声をこらえて泣いていた。宇七も、どうしようもない後悔におそわれながら立っていた。息子

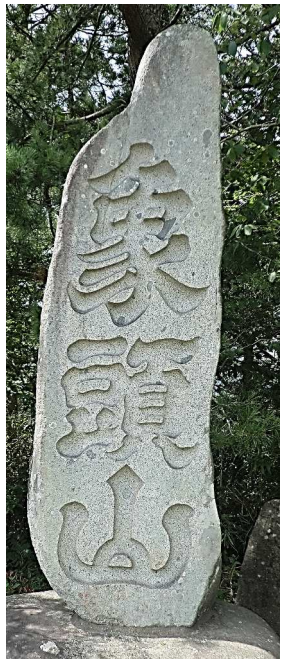
の無事を祈る心は波のように大きくうねり、ゆれるのだった。海を見ているうちに、宇七は、ふと旅の者から伝え聞いた金比羅「象頭山」の石碑が頭にうかんだ。象頭山の石碑は海の守り神である。

「わが生涯で唯一の石碑を刻み神仏に奉る。どうかせがれを助けたまえ。」

不思議なことである。せがれの乗った船は、三日後に、何事もなかったかのように無事尾崎の浜にもどり着いたのだ。

宇七は神仏にさらに感謝し、かの象頭山の石碑を刻んだ。鮎貝の殿様はこの石碑を、航海安全のため、海を見渡せる古谷館の一角に建てた。神仏が宇七の技を知っていたのか。宇七の技が神仏を動かしたのか。とにかく宇七のこの刻は、大きさといい彫りの見事さといい、長く石工の手本とされたという。

象頭山の文字
宇七による



尾崎の口寄せ場
の大日如来像

長須賀の庚申供養塔

庚申塚の正面

津波あとの庚申塚